

# 真諦訳『撰大乘論世親釈』における増広部分の検討（五）

—— 釈依止勝相品（所知依章） ——

岩 田 諦 靜

今回の検討部分には、特にいのち（生命）の誕生と魂（心・本識）の輪廻について、真諦訳は詳細に解説している。

## [1.30] 業不淨章 第二

釋曰。若人、揆<sup>ニ</sup>無<sup>ニ</sup>本識<sup>ヲ</sup>、此人無<sup>下</sup>道理<sup>ト</sup>能成<sup>ニ</sup>立<sup>スル</sup>業<sup>ヲ</sup>染汚<sup>ニ</sup>義<sup>上</sup>。

論曰。復次、業染汚云何<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>成<sup>ル</sup>。緣<sup>レ</sup>行<sup>ヲ</sup>生<sup>ニ</sup>識<sup>分</sup>、無<sup>ニ</sup>得<sup>レ</sup>成<sup>ル</sup>義<sup>一</sup>。

釋曰。行有三<sup>ニ</sup>品<sup>ト</sup>。謂<sup>ク</sup>福<sup>ト</sup>非福<sup>ト</sup>及<sup>テ</sup>不動<sup>ト</sup>、念念<sup>ニ</sup>生滅<sup>ス</sup>。若<sup>シ</sup>離<sup>レ</sup>本識<sup>ヲ</sup>、於<sup>テ</sup>三<sup>ニ</sup>何處<sup>ニ</sup>安<sup>ニ</sup>立<sup>ス</sup>功能<sup>ヲ</sup>。若<sup>シ</sup>汝、言<sup>レ</sup>安<sup>ニ</sup>立<sup>ス</sup>於<sup>テ</sup>六識<sup>中</sup>、是<sup>レ</sup>義<sup>不</sup>然<sup>ク</sup>。六識<sup>不</sup>能<sup>レ</sup>攝<sup>ス</sup>持<sup>ス</sup>諸<sup>ノ</sup>業<sup>ノ</sup>功能<sup>ヲ</sup>。前<sup>ニ</sup>於<sup>テ</sup>煩悩染汚<sup>中</sup>、已<sup>ニ</sup>具<sup>ニ</sup>頭<sup>ニ</sup>此<sup>レ</sup>義<sup>一</sup>。

論曰。若無<sup>ニ</sup>此<sup>レ</sup>義<sup>一</sup>、緣<sup>レ</sup>取<sup>生</sup>有<sup>亦</sup>無<sup>ニ</sup>成<sup>ル</sup>義<sup>一</sup>故、業<sup>ヲ</sup>染汚<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>成<sup>セ</sup>。

真諦訳『撰大乘論世親釈』における増広部分の検討（五）

## チベット訳

「論曰。」業の雑染はどうして成立しないのか。行を縁として識があるとは道理に合わない故である。それ（アーラヤ識）が無いならば、取を縁として有があるとは道理に合わない故である。

「釋曰。」業の雑染の形相には道理に合わないことが起る。「業の雑染は」どうして成立しないのか。行を縁として識があるとは道理に合わないが故である」とは、福と非福と不動の行を生じ滅するアーラヤ識（D. 135 a）が無いならば、云何が熏習が成立するのか。それ故に、六識身により熏習を撰持することができないことは、前

真諦訳「根大乘論世親釈」における増広部分の検討(五)

釋曰。若無<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>業功能<sub>一</sub>識<sub>上</sub>、謂<sub>二</sub>行緣<sub>一</sub>識、緣<sub>レ</sub>取生<sub>レ</sub>有、無<sub>レ</sub>道理得<sub>レ</sub>成。何以故。

此識、三行所<sub>レ</sub>熏、以<sub>レ</sub>隨<sub>二</sub>四取<sub>一</sub>故、由<sub>二</sub>熏習<sub>一</sub>圓滿<sub>レ</sub>故、識成<sub>レ</sub>有。此識或<sub>レ</sub>滅或<sub>レ</sub>余識<sub>三</sub>所<sub>レ</sub>間、此識體、已識功能亦隨<sub>レ</sub>滅。當<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>何處<sub>一</sub>安<sub>レ</sub>。此行有<sub>二</sub>業功能<sub>一</sub>。故業染汚<sub>レ</sub>不成。言<sub>二</sub>染汚<sub>一</sub>者、此業与<sub>二</sub>煩惱<sub>一</sub>相應故、名<sub>二</sub>染汚<sub>一</sub>。又從<sub>二</sub>染汚<sub>一</sub>生<sub>レ</sub>故名<sub>二</sub>染汚<sub>一</sub>。能感<sub>二</sub>六道生死染汚果報<sub>一</sub>故名<sub>二</sub>染汚<sub>一</sub>。

真諦訳には釋曰が付加されていて、そこに「若人<sub>レ</sub>撰<sub>二</sub>無本識<sub>一</sub>、此人無<sub>レ</sub>道理能成<sub>二</sub>立業染汚<sub>一</sub>義<sub>上</sub>。」と説いて、阿黎耶識の存在を否定すれば、業の染汚を証明することができないということを説いている。

真諦訳とチベット訳等他訳とはほぼ一致している。しかし、真諦訳には、三行、四取が説かれている。六道生死の染汚の果報を感じるのが染汚であると説いている。

[13] 生不淨章 第三

釋曰。若離<sub>二</sub>本識<sub>一</sub>、生染汚無<sub>レ</sub>有。道理、此義不<sub>レ</sub>成。今當<sub>レ</sub>説<sub>レ</sub>之。

論曰。復次、云何生染汚、此義不<sub>レ</sub>成。結<sub>二</sub>生不<sub>レ</sub>成<sub>一</sub>故。

釋曰。此生、若謝<sub>二</sub>由業功能<sub>一</sub>、結<sub>二</sub>後報<sub>一</sub>接<sub>二</sub>前<sub>一</sub>報、此義則不<sub>レ</sub>成就。何以故。

に煩惱の雑染のことを説く中で成立することを明かしている。「それが無いならば」とは、行を縁として識が無いことである。「また、取を縁として有があるとは道理に合わない」とはその故に、行によって熏成せられたる識は取の力により熏習の生長により有が生ずるからである。その中で、「業である雑染」とは、業の雑染であり、或は業による雑染とは業の雑染であり、若しアーラヤ識が無いならば、それはまた成立することはない。

チベット訳

「論曰。」「若しアーラヤ識が無いならば、「生の雑染は云何が有り得ないのか。」「それは」結生の相續することが有り得ないが故である。

「釋曰。」「またその時、「若しアーラヤ識が無いならば、「生の」雑染は云何が有り得ないのか。」「それ「生の雑染」が説かれる故である。また、「結生の相續することが有

り得ないが故である。」とは、自体の性を得ることは理に応じないからである。

真諦訳の初めの釋曰の注釈がチベットの訳等他訳の前半と一致する。しかし、結生相続についての注釋は真諦訳には無い。

(A) [1.32] 論曰。若人、於不静地退墮、心正在中陰、

起染汚意識、方得受生。

釋曰。不静地、退前生墮後生故、名退墮。受生有二種。或有中陰、或無中陰。今偏說受中陰者。若在中陰、將欲受生、必先起染汚意識、方得受生。

論曰。此有染汚識於中陰中滅。

釋曰。此中陰染汚識、緣生有為境界。此識於中陰中滅。何以故。生陰無染汚故。

論曰。是識託柯羅邏、於母胎中、變合受生。釋曰。是識即是意識。於一時中、与柯羅邏相應故、言託柯羅邏。此果報識異前染汚識故、言變、由宿業功能起風、和合赤白、令与識同故言合。即名此為受生。

(B) 論曰。若但意識變、成柯羅邏等、依止此意識、

チベット訳

「論曰。」不定地（欲界）より没したところの心が中有に住する時、有染汚の意識によって結生を相続して、その有染汚の意識は中有において滅して、しかも「あるから何らかの」識が母の胎内においてカララ性として和合（凝結）する。

(1) 若し、「その識がアーラヤ識では無く」その「中有の」意識そのものが和合するとするならば、その和合「した識」を依止として母の胎内において意識が起ってくるであろうし、それによって「中有に在った識と母の胎内に在った識との」二つの意識が同時に母の胎内に起ることになろう。「しかし、これは不合理である。」

(2) その和合の意識には意識性としては認められない。恒（長）時に有染汚の依止として、意識の所縁にお

於二母胎中ニ有レ別意識ト起、無如レ此義。

釋曰。若汝、執下此識入二柯羅邏數ニ但是意識上ト

若是意識根塵生起、与余意識ニ為レ同、為レ異、若

言ニ是同、此識謝時、柯羅邏即成壞滅。若言ニ不

同、則不三說名ニ意識。何以故。意識通以ニ

三性識ニ為レ根、此識但以ニ染汚識ニ為レ根。意識

縁三世ニ為レ境、此識境界不レ可レ知。意識有時興、

有時廢、此識恒有無レ廢。故不レ同ニ意識。又

若同者、於ニ無識地中ニ成レ無レ此識。若無レ此識、

不レ成言入ニ無心定ニ識不レ離身。又、若無レ識、身

則成壞。是故不レ可レ說此為レ意識。若汝、說下此

意識不レ可レ分別。根塵生起、依ニ止此識、於ニ母胎

中ニ別生中意識上、是義不レ然。何以故。

(C)論曰。於ニ母胎中、二種意識一時俱起、無レ此

義一故。

釋曰。此言、證下前無ニ意識義上。以ニ三意識、同

性、必不ニ俱生、無ニ並作意故。此意識託ニ柯羅

邏、与ニ赤白ニ和合同、依止。此識有ニ別意識生、

一時俱起、此柯羅邏識不レ成三意識。何以故。恒

以ニ染汚識ニ為レ依止。此所依止識、欲等所染、縁

生有境一起。能依止識既果報。但無記性、所縁

いて所縁が無い故である。

(3)また、しっかりと和合したその「中有の」意識があるというのは、云何がその和合した意識が一切の種子を有するものであるのか、或はまた若しそれを依止として「生ずる所の余の意識が一切種子識として」あるのか。若しその和合「せる意識」が一切の種子を有するならば、それにより意識という「別の名称で」アラーヤ識の異名を確立するのである。若しそれ(染汚の意識)を所依として一切の種子であるならば、それにより(その場合には)所依の法により作らされる識であるその一切の種子「識」が有するものではないというならば、能依の果「識」を生ずるものとして、一切の種子「識」であることは全くあり得ない。

その故に、和合識(凝結せる識)があるその意識は有るものではなく、それは異熟識であり、一切種子「識」であるという、そのことを成立する。

「釋曰。」「不定地より」とは欲界よりとのことである。

「没した」とは死したことである。「有染汚の意識によって」とは染汚を俱なう意識のことである。「結生を相續して」とは自体の有を撰受するをいう。また、その染汚

境、又不可<sup>レ</sup>知、不可<sup>レ</sup>立<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>意識<sup>ト</sup>。若<sup>シ</sup>立<sup>レ</sup>此、為<sup>ニ</sup>意識<sup>ト</sup>、則<sup>レ</sup>無<sup>ニ</sup>並起<sup>ノ</sup>義<sup>ニ</sup>。若<sup>シ</sup>有<sup>ニ</sup>並起<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>應<sup>ニ</sup>同<sup>レ</sup>了<sup>レ</sup>別<sup>一</sup>、應<sup>ニ</sup>同<sup>レ</sup>滅<sup>無<sup>ニ</sup></sup>。若<sup>シ</sup>同<sup>レ</sup>了<sup>レ</sup>別<sup>一</sup>、無<sup>ニ</sup>滅<sup>ノ</sup>心定<sup>ニ</sup>。以<sup>テ</sup>了<sup>レ</sup>別<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>滅<sup>ノ</sup>、一<sup>ニ</sup>了<sup>レ</sup>別<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>。若<sup>シ</sup>同<sup>レ</sup>滅<sup>無<sup>ニ</sup></sup>、則<sup>レ</sup>無<sup>ニ</sup>功用<sup>ノ</sup>自然<sup>ノ</sup>涅槃<sup>ニ</sup>。以<sup>テ</sup>心<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>更<sup>レ</sup>起<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>。

(D)論曰。已<sup>ニ</sup>變<sup>レ</sup>異<sup>ノ</sup>意識<sup>ト</sup>。

釋曰。初<sup>ニ</sup>受<sup>レ</sup>生<sup>ノ</sup>識、已<sup>ニ</sup>變<sup>レ</sup>異<sup>ノ</sup>為<sup>ニ</sup>柯羅邏<sup>ト</sup>。

論曰。不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>成<sup>立</sup>為<sup>ニ</sup>意識<sup>ト</sup>。

釋曰。凡<sup>ニ</sup>有<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>義<sup>ト</sup>。不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>立<sup>ニ</sup>初<sup>ニ</sup>受<sup>レ</sup>生<sup>ノ</sup>識<sup>ト</sup>為<sup>ニ</sup>意識<sup>ト</sup>。

一。

論曰。依<sup>レ</sup>止、不<sup>レ</sup>清<sup>淨</sup>故<sup>ニ</sup>。

釋曰。意識<sup>ニ</sup>從<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>性<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>生<sup>ス</sup>。初<sup>ニ</sup>受<sup>レ</sup>生<sup>ノ</sup>識<sup>ト</sup>必<sup>ズ</sup>從<sup>ニ</sup>染<sup>汚</sup>識<sup>ト</sup>生<sup>ス</sup>。即<sup>チ</sup>是<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>止、不<sup>レ</sup>清<sup>淨</sup>。

論曰。長<sup>ニ</sup>時<sup>ノ</sup>緣<sup>ノ</sup>境<sup>ト</sup>故<sup>ニ</sup>。

釋曰。初<sup>ニ</sup>受<sup>レ</sup>生<sup>ノ</sup>識、從<sup>レ</sup>始<sup>ニ</sup>至<sup>レ</sup>終<sup>ノ</sup>緣<sup>レ</sup>境<sup>ト</sup>無<sup>レ</sup>塵<sup>ト</sup>、意

識<sup>ノ</sup>緣<sup>レ</sup>境<sup>ト</sup>易<sup>ニ</sup>脫<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>定<sup>ト</sup>。

論曰。所<sup>レ</sup>緣<sup>ノ</sup>境<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>知<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>。

釋曰。初<sup>ニ</sup>受<sup>レ</sup>生<sup>ノ</sup>識、所<sup>レ</sup>緣<sup>ノ</sup>境<sup>ト</sup>不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>知<sup>ト</sup>。意識<sup>ノ</sup>緣<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>境<sup>ト</sup>及<sup>ニ</sup>非<sup>ニ</sup>三<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>境<sup>ト</sup>、此<sup>レ</sup>則<sup>チ</sup>可<sup>レ</sup>知<sup>ト</sup>。由<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>三<sup>ノ</sup>義<sup>ト</sup>有<sup>レ</sup>異<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>立<sup>ニ</sup>為<sup>ニ</sup>意識<sup>ト</sup>。

論曰。若<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>意識、已<sup>ニ</sup>變<sup>レ</sup>異<sup>ト</sup>、

の意識は生有における縁により中有において滅するであらう。その「和合」とは意識は精液と血と俱に成ると安樂が一つに成る（安危同一）ことであり、その和合する意識を所依として余の意識が生ずるであらう。「同処」とは一時にその和合する意識と意識とが相応することである。そのことはいかなる理由であるか。恒時に染汚を所依とするが故にと、意識は貧欲等の煩惱に染汚される意の所依にして、生有を縁する染汚の意はその所依であるから、それは「染汚の所依である」その異熟は阿含に説かれない位で、それは染汚の所依は有ではない。「意識の所依において所縁のない」とは、意識は所縁により現起する、このように有である。その和合する中には彼の所縁は無い、その故に、これは意識性について理に應じない。

真諦訳「撰大乘論世親釈」における増広部分の検討 (五)

釋曰。若已受生意識与三赤白一和合、變三前識、  
作二後識、後識異三前識。

論曰。是時意識成三柯羅邏。  
釋曰。由レ成三柯羅邏一故、變異。

論曰。為三此識、是一切法種子。為下依止此識、  
生中余識。

釋曰。為レ當下以三受生識一為一切法種子上。為レ當下依止受生識、  
別生中余識、為一切法種子。

論曰。若汝、執三已變異識、名三一切種子識、  
即是阿梨耶識。汝、自以別名。成立謂レ為三意識。

釋曰。若汝、執三受生識一為三種子識、則与三我所說、  
義一同、即是說三阿梨耶識一為三種子識。汝、自不三

說名三阿梨耶識、別立一名三意識。

論曰。若汝、執能依止識、是一切種子識、  
釋曰。依止受生識、更生三余識一名三能依止識、  
為三一切種子識。

論曰。是故、此識由三依止三成三他因、  
釋曰。別識、既從レ他生、則不能三自為三種子。

是故。此識由レ依止受生識、方成三種子一得レ  
為三他因。

論曰。此所依止識、若非一切種子識、能依止名一切種子識、是義不成。

釋曰。別識不能自為種子、由依他得成種子。所依受生識既非種子、能依別識立、為種子識、此義、豈成。

論曰。是故、此識託生變異、成柯羅邏、非是意識。

釋曰。此識即是阿梨耶識、不得三名此為意識。論曰。但是果報、亦是一切種子、此義得成。

釋曰。從種子生故、稱果報識、能攝二種子故、亦名種子識。若作此說、義乃得成。

この箇所は欲界における、死から生への輪廻について具体的に説いている。

(A)と(C)の部分にはチベット訳等他訳とほぼ一致している。しかし、詳しく見るとやはり真諦訳の方は解釈が加えられている。(A)においては、不静地(欲界)において、前生を退き後生に墮する。それには二種の受生が有ると説き、一には中陰に受生する有があり、二には中陰に受生しない者があると解説している。中陰に受生しない者とは善業の力によって輪廻の業により解脱した者を言うのであろう。今、ここで問題にするのは、中陰に受生する者を対象としている。その中陰に受生するのは染汚の意識によって受生することを得るのである。しかし、その中陰において、受生して生有を得た者はその時点において中陰における染汚の意識は滅して生陰(生有)には染汚の意識は無いものと説いている。それはどのように考えられているかと云えば、その染汚の意識はカララに託し、母の胎内において変じ合

して生を受けるからであるとする。注釈には、それは一時に中に於いてカララと相応するが故に「カララに託す」のであると説く。このカララに託して受生した識(生命)は中陰(中有)における染汚の意識が滅して生陰(生有)に起ったところの識であり、それを果報識(異熟識)として考えている。それは前の染汚識が「変じ合して生を受けた」からであるとする。そして、「変じ合して受生する」ところの働きは何によるかといえ、真諦は宿業の機能によるのだと解説する。それによれば、宿業の機能に由って風を起し父母の赤白の精液と和合して識(生命・果報識)と同一になる、それを受生と為すのであると解釈している。

(B)の部分の注釈は真諦訳だけにある解釈である。論の本文は、染汚識が変じ合してカララ等を成じ、その意識に依止して、母の胎内において別の意識が有って起ったとする説は正義ではないと説く。これに対する注釈(B)は他訳には無く真諦訳だけにあるものである。

その解釈は此の識即ち此の果報識(異熟識)が無いならばカララも壊滅するものとなることを説いている。染汚の意識は善悪無記の三性の識を以って根(依止)と為すが、此の識(果報識・異熟識)は但だ染汚意識(第七阿陀那識)のみを以って根(依止)と為すものである。意識は三世を所縁の境とするが、此の識の境界(果報識)はそれを取らない。意識(前六識)は有時は興り有時は廃(滅)するが、此の果報識は恒に有って廃(滅)することはないとする。また、此の果報識が無ければ身体を摂持することはできないと説いている。

(C)の部分では、母の胎内において、二種の意識は一時(同時)に俱起することは認められないことを明す。その二種の意識とは中陰における前の染汚意識は生陰においてカララに託し、父母の赤白の精液と合してカララの識を成ずる。このカララの識は前の染汚の意識と同じものではないから二種の意識は一時に俱起しないとす。このカララの識は恒に染汚意識(第七識)を依止としているからである。

この所依止の識(第七識)は貧欲等に染せられて生有の境を縁じて起る。能依止の識は果報識(異熟識)であり、無記性である。それは所縁の境を知覚することがないことから染汚意識ではないと説いている。このように所依止の識と能依止の識との相違が有るから滅盡定が認められるのであり、若し無ければ認められないと説いている。

(D)の部分では、初受生識が説かれている。この初受生識は変異してカララと為ると説く。このカララである初受生識について真諦は三義を説いている。即ち、一には、意識は善悪無記の三性の心より生ずる。しかし、初受生識は必ず染汚の意識より生ずるものであり、その依止は染汚であり清浄ではない。二には、初受生識は始より終りに至るまで長時に境を縁じて廃することは無い。これに対して意識は境を縁ずるのに易脱不定である。三には、初受生識は所縁の境は知覚しないものである。これに対して、意識は三世の境と非三世の境を縁ずると解釈している。

「変異する」とは、受生の意識と父母の赤白の精液との和合とするならば、前識を変じて後識と作すものであって、後識は前識と異なることであると説く。

また次に、真諦訳は、受生識は変異なる意識であり、一切種子識であり、阿黎耶識であり、果報識（異熟識）であると説く。更にまた、所依止の識と能依止の識についても解説している。

(A) [1.33] 論曰。復次、若衆生已託生、能報持所余色根。

離果報識、則不可得。

釋曰。前已明正受生義、今更明受生後義。前

已明衆生在胎中、今明衆生出胎外故。言衆

生已託生。衆生、若已託生、則定有三義。

一報持無廢。二通撰持諸根。三體、是果

報無記。若離阿梨耶識、此三義不可得。

(B) 論曰。何以故。所余諸識、定別有依止。

釋曰。欲引道理為證故、言何以故。六識

中、隨一識稱所余諸識。眼識定以眼根為依

止、乃至身識定以身根為依止。明別依止、

チベツト訳

〔論曰。〕また、結生（託生）を相統し終つて、諸の色根を執持する、その処より他には異熟識は認められないし、それを離れた多くの他の識は各々別々の所依と堅住することができないが故である。だから「アーヤ」識を離れた有色根は道理に合わない。

〔釋曰。〕「結生を相統し終つて」とは、自己の身体を得ることである。「その処より他に」とは、アーヤ識を離れないということが「他に」ということである。「それを離れた多くの他の識は各々別々の所依と堅住することができないが故に」とは、「多くの他の六識とは各々

真諦訳「撰大乘論世親釈」における増広部分の検討(五)

頭<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>能<sup>ニ</sup>通<sup>ス</sup>執持<sup>一</sup>。<sup>スルコト</sup>

論曰。不<sup>レ</sup>久<sup>ニ</sup>堅住<sup>一</sup>。

釋曰。五識中、隨<sup>ヒテ</sup>自<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>根<sup>一</sup>、若<sup>シ</sup>能<sup>ク</sup>執持<sup>ス</sup>、此<sup>ノ</sup>識<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>久<sup>ニ</sup>堅住<sup>一</sup>。以<sup>テ</sup>相<sup>レ</sup>統<sup>ス</sup>易<sup>ク</sup>壞<sup>ル</sup>故<sup>一</sup>。或在<sup>カ</sup>無<sup>ニ</sup>識<sup>ノ</sup>地<sup>中</sup>、故<sup>ニ</sup>壞<sup>ス</sup>、或<sup>ハ</sup>余<sup>ノ</sup>識<sup>間</sup>起<sup>ル</sup>故<sup>一</sup>壞<sup>ス</sup>。

論曰。若<sup>シ</sup>此<sup>ノ</sup>色<sup>根</sup>無<sup>ニ</sup>執持<sup>識</sup>、亦<sup>ハ</sup>不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>成<sup>ス</sup>。<sup>スルコトヲ</sup>

釋曰。如<sup>ク</sup>下<sup>ニ</sup>死<sup>人</sup>色<sup>根</sup>、無<sup>ニ</sup>識<sup>ノ</sup>執持<sup>一</sup>、則<sup>チ</sup>便<sup>チ</sup>爛<sup>ル</sup>壞<sup>ス</sup>上<sup>ニ</sup>、若<sup>シ</sup>離<sup>レ</sup>執持<sup>識</sup>、諸<sup>ノ</sup>根<sup>亦</sup>必<sup>ズ</sup>爾<sup>ニ</sup>。此<sup>ノ</sup>義<sup>亦</sup>不<sup>レ</sup>成<sup>ス</sup>。

真諦訳が解釈するように、先に受生の義を説明したものであり、今この所は受生後の義を説明する所である。受生義とは衆生の母の胎中に在ることであり、受生後の義とは衆生の母の胎外に出たことを明すことであると説く。

(A)の部分について、真諦訳だけに「託生の三義」が説かれる。即ち、一には、執持して廃することが無い。二には、通じて諸根を摂持する。三には、その自体は果報(異熟)であって無記性であると説いている。この託生の義に關して「若し阿梨耶識を離るれば、この三義得べからず」と解説している。

(B)の部分の注釈は、チベット訳等他訳とほぼ一致するようである。しかし、詳しく見ると真諦訳はより説明的であり、具体的に、無識地の名がある。また、死人の色根(肉体)は識の執持する働きが無くなると爛壞することになる如く、若し執持識を離るれば、諸根を爛壞することになると説く。これは諸根(肉体)の執持相統が有ることは執持識(阿陀那識)であるということを示している。

別々の所依と転動するとの故である。眼識は各々別々の所依が有るが如く、所余の耳識等もまた所余の耳等の色根を能依とする。若し、それらの識が各自の所依を執持するのに対して、それらの識が減するならば所得の眼等「の諸根」は腐敗するのである。

[134] 論曰。復次、此<sup>ノ</sup>識<sup>及</sup>名<sup>色</sup>、更<sup>ニ</sup>互<sup>ニ</sup>相<sup>レ</sup>依<sup>ス</sup>、譬<sup>ハ</sup>如<sup>ク</sup>三<sup>蘆</sup>束<sup>、</sup>相<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>俱<sup>レ</sup>起<sup>一</sup>、此<sup>ノ</sup>識<sup>不</sup>レ<sup>レ</sup>成<sup>ス</sup>。

チベット訳

[論曰。]また、識と名色とは蘆束の如く相互に相

釋曰。於<sub>二</sub>經中<sub>一</sub>佛世尊說。識依<sub>二</sub>名色<sub>一</sub>生、名色依<sub>二</sub>識<sub>一</sub>生。名是非色、四陰、色即柯羅邏。何者是依<sub>二</sub>名色<sub>一</sub>。識由<sub>三</sub>此名色<sub>為<sub>二</sub>依止<sub>一</sub></sub>、剎那<sub>二</sub>依<sub>三</sub>生相<sub>流<sub>レ</sub>不斷<sub>一</sub></sub>。能<sub>レ</sub>撰<sub>二</sub>名色<sub>一</sub>、令<sub>二</sub>成就<sub>一</sub>、不<sub>レ</sub>壞。此識名<sub>レ</sub>依<sub>二</sub>名色<sub>一</sub>識。若<sub>レ</sub>撰<sub>二</sub>無<sub>一</sub>本識、以<sub>三</sub>六識<sub>為<sub>レ</sub>識<sub>一</sub></sub>此<sub>レ</sub>發<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>成。若<sub>レ</sub>離<sub>二</sub>阿梨耶識<sub>一</sub>、於<sub>二</sub>六識中<sub>一</sub>是何識。此問欲<sub>二</sub>何所顯<sub>一</sub>。欲<sub>レ</sub>顯<sub>三</sub>余識<sub>不<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>識食<sub>一</sub></sub>。

この箇所はチベット訳等他訳と真諦訳は一致する。識は名色に依り、名色は識に依って成り立つように、アーラヤ識も相互に因縁となつて成立することを明す。本識阿梨耶識を離れては前六識等が成立しないことを説いている。

(A) [1.35] 論曰。復次、若<sub>レ</sub>離<sub>二</sub>果報識<sub>一</sub>、一切<sub>レ</sub>求<sub>レ</sub>生<sub>已</sub>生<sub>衆生</sub>、識食<sub>不<sub>レ</sub>成<sub>一</sub></sub>。

釋曰。此言、欲<sub>レ</sub>顯<sub>下</sub>本識能<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>名色<sub>一</sub>、作<sub>中</sub>識食<sub>上</sub>。何以故。佛世尊說。食有<sub>二</sub>四種<sub>一</sub>。為<sub>二</sub>求<sub>レ</sub>生<sub>已</sub>生<sub>衆生</sub>、

真諦訳「撰大乘論世親釈」における増広部分の検討 (五)

依って俱起する、そのようには異熟識「としてのアーラヤ識」を離れては成立しない。

「釋曰。」また、「アーラヤ識を離れたところの識と名色とは蘆束の如く相互に相い依って俱起する、そのようには成立しない。」という中で、如何に成立しないと説くか。世尊により「説かれる」、名色は識の縁により「俱起する」、或は識は名色の縁により「俱起する」と説かれる、その中に、名(心的存在)は識の縁によるもので、識身である。それは非色「界中の」四蘊であると説かれる。色(物的存在)はカララである。識は、名色の縁により「俱起する」とは、その中で、アーラヤ識より他に何も無いならば、如何なる物がそれは名色に依って、一剎那により同処に展転し断絶しないように起るか。

チベット訳

「論曰。」また、「異熟識を離れて」他の識は諸の已生の有情(成人した人)の「識」食となることは道理に合わないし、異熟識「としてのアーラヤ識」を離れて

相統得<sup>レ</sup>住<sup>ル</sup>。故、説<sup>ク</sup>四食<sup>ヲ</sup>。何者<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>レ四<sup>ト</sup>。一段食<sup>、</sup>二段食<sup>、</sup>三思食<sup>、</sup>四識食<sup>。</sup>段食者<sup>、</sup>變成爲<sup>ス</sup>相<sup>ト</sup>。何以<sup>ヲ</sup>故<sup>。</sup>此段<sup>、</sup>若<sup>シ</sup>變異<sup>、</sup>能作<sup>ス</sup>身利益事<sup>。</sup>是名<sup>ニ</sup>段食<sup>ト</sup>。觸食者<sup>、</sup>依<sup>ル</sup>塵<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>相<sup>ト</sup>。由<sup>リ</sup>縁<sup>ニ</sup>色等<sup>ノ</sup>諸塵<sup>ヲ</sup>能作<sup>ス</sup>利<sup>ニ</sup>益身<sup>ノ</sup>事<sup>ト</sup>。是名<sup>ニ</sup>觸食<sup>ト</sup>。思食者<sup>、</sup>望<sup>シ</sup>得<sup>テ</sup>爲<sup>ス</sup>相<sup>ト</sup>。此望<sup>シ</sup>得<sup>テ</sup>意<sup>、</sup>能作<sup>ス</sup>身利益事<sup>。</sup>如下<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>飢渴<sup>、</sup>至<sup>リ</sup>飲食<sup>處<sup>ニ</sup>、</sup>望<sup>シ</sup>得<sup>テ</sup>飲食<sup>、</sup>令<sup>シ</sup>身<sup>ノ</sup>不<sup>レ</sup>死<sup>。</sup>是名<sup>ニ</sup>思食<sup>ト</sup>。識食者<sup>、</sup>執持<sup>ヲ</sup>爲<sup>ス</sup>相<sup>ト</sup>。由<sup>リ</sup>此<sup>ノ</sup>識<sup>ノ</sup>執持<sup>、</sup>身<sup>ノ</sup>一<sup>ニ</sup>故<sup>、</sup>住<sup>ル</sup>不<sup>レ</sup>壞<sup>。</sup>若<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>識<sup>ノ</sup>執持<sup>、</sup>則<sup>シ</sup>同<sup>ク</sup>死人<sup>ト</sup>、身<sup>ノ</sup>即<sup>チ</sup>爛壞<sup>。</sup>是名<sup>ニ</sup>識食<sup>ト</sup>。是故、汝等亦<sup>レ</sup>應<sup>ニ</sup>信<sup>ニ</sup>受<sup>ス</sup>如<sup>ク</sup>此<sup>ノ</sup>識<sup>ノ</sup>食<sup>ノ</sup>義<sup>。</sup>以下<sup>ノ</sup>能作<sup>ス</sup>利<sup>ニ</sup>益身<sup>ノ</sup>事<sup>ト</sup>上<sup>ノ</sup>故<sup>。</sup>此四食中<sup>、</sup>觸食<sup>、</sup>屬<sup>ス</sup>六識<sup>、</sup>思食<sup>、</sup>屬<sup>ス</sup>三意<sup>、</sup>望<sup>シ</sup>得<sup>テ</sup>一段食<sup>、</sup>屬<sup>ス</sup>色<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>關<sup>ス</sup>心<sup>。</sup>識食<sup>、</sup>於<sup>テ</sup>三三義中<sup>、</sup>屬<sup>ス</sup>二何義<sup>。</sup>若<sup>シ</sup>汝<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>説<sup>ク</sup>有<sup>シ</sup>阿梨耶識<sup>、</sup>依<sup>テ</sup>二何義<sup>、</sup>説<sup>ク</sup>此<sup>ノ</sup>識食<sup>。</sup>復次<sup>、</sup>若<sup>シ</sup>人<sup>ノ</sup>眼中<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>夢<sup>、</sup>及<sup>シ</sup>心悶絶<sup>、</sup>入<sup>ル</sup>滅<sup>ニ</sup>心定<sup>ニ</sup>等<sup>、</sup>六識<sup>、</sup>已<sup>ニ</sup>滅<sup>。</sup>又<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>一段<sup>ノ</sup>思觸<sup>、</sup>三食<sup>、</sup>何<sup>レ</sup>法<sup>ヲ</sup>持<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>身<sup>、</sup>令<sup>シ</sup>不<sup>レ</sup>壞<sup>。</sup>若<sup>シ</sup>無<sup>シ</sup>阿梨耶識<sup>、</sup>執持<sup>、</sup>此<sup>ノ</sup>身<sup>、</sup>則<sup>チ</sup>壞<sup>。</sup>故<sup>ニ</sup>知<sup>、</sup>定<sup>ニ</sup>應<sup>ニ</sup>下<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>阿梨耶識<sup>、</sup>爲<sup>ス</sup>中<sup>ノ</sup>識食<sup>ト</sup>。

(B) 論曰。何以<sup>ヲ</sup>故<sup>。</sup>若<sup>シ</sup>離<sup>ニ</sup>果報<sup>ノ</sup>識<sup>、</sup>眼識<sup>等<sup>中<sup>、</sup></sup></sup>隨<sup>テ</sup>有<sup>シ</sup>一<sup>ノ</sup>識<sup>、</sup>於<sup>テ</sup>三<sup>ノ</sup>界<sup>中<sup>、</sup></sup>受<sup>テ</sup>生<sup>、</sup>衆<sup>生<sup>、</sup></sup>爲<sup>ス</sup>作<sup>ス</sup>食<sup>事<sup>、</sup></sup>不<sup>レ</sup>見<sup>レ</sup>有<sup>シ</sup>能<sup>シ</sup>故<sup>。</sup>

は、六識<sup>(1)</sup>によつては、どれを取つても、三界の中の諸の已生の有情に対して食事となることは得られない。「釋曰。」「異熟識を離れて」他の識「は諸の已生の有情」の「識」食となることは道理に合わない」とは、教示されている。食には、世尊により四種が説かれる。

「四種とは」(1)段食と、(2)觸「食」と、(3)意思「食」と、(4)識「食」とである。その中で、(1)段食とは變異(變化)することである。なんとすれば、變異する(D. 136 a)とは所依(身体)を利益(適合)することを作すことである。(2)觸食とは境(塵)を有することであり、色等の諸境をただ見るだけにより所依を利益することを生ずることである。(3)意思食とは希望を有することである。なんとすれば、希望により所依を利益することを作することである。「譬えば」「人の」渴きにより苦しむも、水を見ることにより死せざるが如し。(4)識食とは執持を有することである。それはただ領受となるにより所依に住する。それにより他のものは死体のように腐敗する。その故に、所依を利益することを作するが故に、識食であることは了解せらるべきである。その中で、觸食とは六識身に有るものである。意識食とは意による希望である。別に識食において説かれるのは無心「定」の隨眠と悶絶

釋曰。若離<sup>ニ</sup>本識<sup>ヲ</sup>、於<sup>テ</sup>六識<sup>中</sup>隨<sup>フ</sup>於<sup>ニ</sup>一識<sup>一</sup>、於<sup>テ</sup>三界<sup>中</sup>已<sup>ニ</sup>受生<sup>ス</sup>衆生<sup>ニ</sup>、不<sup>レ</sup>見<sup>テ</sup>此識<sup>有</sup>三功能<sup>能</sup>作<sup>中</sup>食<sup>事</sup>。故知<sup>、</sup>說<sup>ニ</sup>余識<sup>一</sup>爲<sup>ニ</sup>識食<sup>一</sup>此義<sup>不</sup>成<sup>セ</sup>。

と滅「心」定に入るに於いて六識が減するときに、「若し」アールヤ識「の執持すること」が無いならば他に身体(所依)を執持して腐敗しないようにするものがあるか。[そのような識は有り得ない。]

この箇所はほぼ一致する。しかし、詳しく見ると、(A)の部分も説明的に解釈されている。識食の三義はチベット訳にも説かれるが、真諦訳は詳しく三義に区分して説明している。

(B)の部分は真諦訳だけにあるものである。ここでは本識即ち阿黎耶識を離れては眼識等の前六識の中の一識によつては三界の中に受生する衆生を執持する功能は有り得ないことを説いている。

注

(一) チベット訳北京版10aとテルゲ版9bとは共に、mam par smin pah'i mam par ses pa drug poであるが、三漢訳により mam par smin pah'iを除いて、六識と和訳した。長尾本「撰論和訳」では、和訳の箇所は六識となっているが、ローマナイズのチベット訳「撰論」は原文のままになっている。

(A) [1.36] 論曰。若人、從<sup>ニ</sup>此生<sup>ニ</sup>捨<sup>テ</sup>命<sup>ヲ</sup>、生<sup>ニ</sup>上<sup>ニ</sup>靜地<sup>一</sup>由<sup>ニ</sup>散

チベット訳

動染汚意識<sup>一</sup>、於<sup>レ</sup>彼<sup>ニ</sup>受生<sup>ス</sup>。  
釋曰。於<sup>テ</sup>靜地<sup>中</sup>、離<sup>ニ</sup>本識<sup>ヲ</sup>受生<sup>ス</sup>、此義<sup>則</sup>不<sup>レ</sup>成<sup>セ</sup>。  
若人、受生<sup>ス</sup>、必<sup>ズ</sup>由<sup>ニ</sup>染汚<sup>ニ</sup>心<sup>一</sup>。若<sup>ク</sup>於<sup>テ</sup>靜地<sup>ニ</sup>受生<sup>ス</sup>、必<sup>ズ</sup>由<sup>ニ</sup>染汚<sup>ニ</sup>散動<sup>ニ</sup>心<sup>一</sup>。染汚<sup>者</sup>、爲<sup>ニ</sup>自<sup>ニ</sup>靜地<sup>ニ</sup>惑<sup>ニ</sup>所<sup>ニ</sup>染汚<sup>一</sup>。此惑<sup>、</sup>何相<sup>、</sup>貪<sup>ニ</sup>定味<sup>ニ</sup>等<sup>ヲ</sup>。此惑<sup>、</sup>定<sup>ニ</sup>在<sup>ニ</sup>靜地<sup>一</sup>。

「論曰。」この処(欲界の生)から死んで、「上の色界・無色界の」靜地に生ずるときには、靜地にあらざる(不靜地の)染汚(散動染汚)の意識によって結生し相續する。また更に、異熟識を離れては、不靜「地」の染汚(散動染汚)の心は、彼の地(靜地)の中にお

真諦訳「撰大乘論世親釈」における増広部分の検討(五)

(B) 若人、從<sub>レ</sub>散地<sub>ニ</sub>死<sub>シ</sub>、用<sub>テ</sub>下<sub>ニ</sub>散動地<sub>ノ</sub>心<sub>ニ</sub>、於<sub>レ</sub>上<sub>ニ</sub>受生<sub>スルハ</sub>。無<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>義<sub>ヲ</sub>。何以<sub>ニ</sub>故<sub>ニ</sub>。凡<sub>ソ</sub>受生<sub>スルハ</sub>者<sub>ハ</sub>、必<sub>ズ</sub>在<sub>レ</sub>散心<sub>ニ</sub>。故<sub>ニ</sub>。若<sub>シ</sub>離<sub>ニ</sub>本識<sub>ヲ</sub>、此<sub>ノ</sub>散動識<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>ル</sub>。若<sub>シ</sub>人<sub>者</sub>、是<sub>レ</sub>離欲<sub>ノ</sub>人<sub>ニ</sub>、從<sub>レ</sub>此<sub>ノ</sub>欲界<sub>ニ</sub>生<sub>ス</sub>。色<sub>ハ</sub>無<sub>レ</sub>色界<sub>ニ</sub>。染汚<sub>ノ</sub>者<sub>ハ</sub>、即<sub>チ</sub>中陰<sub>ノ</sub>心<sub>ニ</sub>、起<sub>リ</sub>上<sub>ニ</sub>地惑<sub>ヲ</sub>。散動<sub>ノ</sub>者<sub>ハ</sub>、即<sub>チ</sub>正<sub>ニ</sub>受生<sub>スル</sub>識<sub>ニ</sub>。於<sub>レ</sub>彼<sub>ニ</sub>受生<sub>ス</sub>者<sub>ハ</sub>、即<sub>チ</sub>方便生<sub>及</sub>正生<sub>ス</sub>。

(C) 論曰。是<sub>レ</sub>染汚散動識<sub>ハ</sub>、於<sub>テ</sub>靜地<sub>中</sub>、離<sub>ニ</sub>果報識<sub>ヲ</sub>、有<sub>レ</sub>余<sub>ノ</sub>種子<sub>ハ</sub>、此<sub>ノ</sub>義<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>成<sub>ズ</sub>。

釋曰。若<sub>シ</sub>受<sub>ニ</sub>正生<sub>ニ</sub>、必<sub>ズ</sub>具<sub>ニ</sub>四義<sub>ヲ</sub>、以<sub>テ</sub>染汚<sub>ヲ</sub>為<sub>レ</sub>根<sub>ト</sub>、散動<sub>ヲ</sub>為<sub>レ</sub>位<sub>ト</sub>、果報<sub>ヲ</sub>為<sub>レ</sub>體<sub>ト</sub>、有<sub>レ</sub>余<sub>ノ</sub>種子<sub>ヲ</sub>為<sub>レ</sub>功能<sub>ト</sub>。若<sub>シ</sub>離<sub>ニ</sub>本識<sub>ヲ</sub>、此<sub>ノ</sub>四義<sub>ハ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得<sub>ル</sub>故<sub>ニ</sub>、應<sub>ニ</sub>信<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>阿黎耶識<sub>ヲ</sub>。何<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>故<sub>ニ</sub>。於<sub>テ</sub>此<sub>ノ</sub>識<sub>中</sub>、靜地<sub>ノ</sub>心<sub>ノ</sub>熏習<sub>ヲ</sub>、無<sub>レ</sub>始<sub>ニ</sub>以來<sub>ニ</sub>有<sub>レ</sub>余<sub>ノ</sub>未<sub>レ</sub>盡<sub>ス</sub>。由<sub>テ</sub>此<sub>ノ</sub>功能<sub>ニ</sub>靜地<sub>中</sub>有<sub>レ</sub>種子<sub>ト</sub>。散動果報識<sub>於</sub>レ<sub>レ</sub>彼<sub>ニ</sub>受生<sub>ス</sub>。

この箇所は(A)と(B)と(C)との部分に区分できる。(A)の部分は真諦訳とチベット訳等他訳とほぼ一致する。(B)の部分は真諦訳の解釈である。そこでは、受生する者は必ず散心に在ることと、離欲の人は欲界より色界無色界に生ずることが解説されている。(C)の部分は、無始以来より来た異熟識である阿黎耶識が有ることを説くところである。それに真諦訳は、異熟識の働きである正生(生有)について、方便生(中有)から正生(生有)に再生するに当たっての四義を説いている。

いてその種子と俱にあることは認められない。

「釋曰。」また、靜「地」の如くに相応しない顕示する。これは染汚の識により結生し相続する。靜地における染汚と不靜「地」により結生し相続する。「染汚」とは彼の地(靜地)の煩惱による染汚である。彼の地の煩惱とは三昧の美味であることである。その染汚の心は靜地のものであり、不靜「地」(散動)の心でもある。かくの如く、この不靜地より死んだものが、死んだところの心であるところの彼の地(靜地)と和合する。それにより、アーラヤ識「の存在」は確かに是認されるべきである。若し、無始の時より来た、彼の地(靜地)の心の熏習が有るならば、その心の熏習により、それが現行する、それにより結生し相続する。

[1.37] 論曰。復次、若衆生<sup>シ</sup>生<sup>ゼン</sup>無色界<sup>ニ</sup>、

釋曰。顯<sup>ハス</sup>已<sup>ニ</sup>解脫<sup>ケル</sup>色界<sup>ニ</sup>。

論曰。離<sup>レ</sup>一切種子果報識<sup>ヲ</sup>、

釋曰。若無<sup>ニ</sup>本識<sup>一</sup>、若実有<sup>、</sup>汝揆<sup>シテ</sup>言<sup>フ</sup>無<sup>。</sup>故名<sup>ニ</sup>爲<sup>レ</sup>離<sup>。</sup>

爲<sup>レ</sup>離<sup>。</sup>

論曰。若生<sup>シ</sup>染汚心及善心<sup>、</sup>

釋曰。若於<sup>ニ</sup>定中<sup>一</sup>、起<sup>ニ</sup>貪定味染汚心<sup>、</sup>或起<sup>ニ</sup>上地有

流善心<sup>一</sup>。

論曰。則無<sup>ニ</sup>種子并<sup>レ</sup>依止<sup>一</sup>、染汚及善<sup>ニ</sup>二識<sup>一</sup>、皆不<sup>レ</sup>得<sup>レ</sup>成<sup>。</sup>

釋曰。無<sup>ニ</sup>種子<sup>一</sup>謂<sup>ニ</sup>無因<sup>一</sup>。由<sup>ル</sup>無<sup>レ</sup>因故則無<sup>ニ</sup>依止<sup>一</sup>。

復次、若無<sup>ニ</sup>種子<sup>一</sup>、是則無<sup>レ</sup>因。若無<sup>レ</sup>因從<sup>レ</sup>何而

生<sup>。</sup>若無<sup>ニ</sup>依止<sup>一</sup>、云何相續<sup>得<sup>レ</sup>住<sup>。</sup></sup>。何以故<sup>。</sup>

此<sup>ニ</sup>二心<sup>一</sup>、由<sup>ニ</sup>本識所<sup>レ</sup>攝<sup>。</sup>是故、從<sup>ニ</sup>自種子<sup>一</sup>生<sup>、</sup>依<sup>ニ</sup>

止<sup>ニ</sup>本識<sup>一</sup>故、得<sup>ニ</sup>相續<sup>住<sup>一</sup></sup>。

### チベット訳

〔論曰。〕また、「人が」無色界に生じたときには、染汚を有する善の心が有ることに対して、一切の種子を有する異熟識を離れては、染汚を有する心と善の心とは種子も無く、「それを支える」依止も無いことにならう。

〔釋曰。〕「無色界に生じたときには」とは、色「界」(D. 136 b) から解脫することである。「染汚を有する心と善の心」とは、三味の美味 (sapid), 貪定味、愛味) のことである。「種子も無く」それを支える「依止も無い」とは、因が無いことと、依止が無いことである。また他の義がある、因が無くして何により生ずるか、依止が無くして何より所依として転ずるかとならば、その心はアーラヤ識の中において、識により摂受するところの自らの種子により生じるであろうと、その処 (アーラヤ識) を所依としてその自体の相續して転ずることになる。

この箇所は真諦訳とチベット訳等他訳とはほぼ一致している。説くところは、色界を解脫して無色界に生じた人について、染汚心と善心との二識が有ることを明す。しかし、それらの識は一切種子である異熟識を離れては成り立つものではないことを明らかにしている。その二識について真諦訳は貪定味の染汚心と上地の有流の善心であると説いている。

[1.38] 論曰。於<sub>テ</sub>無色界<sub>一</sub>、若<sub>シ</sub>起<sub>ス</sub>無流心<sub>一</sub>、所余世間心已<sub>ニ</sub>滅盡<sub>セリ</sub>、便<sub>チ</sub>應<sub>ニ</sub>棄<sub>ル</sub>於<sub>レ</sub>此道<sub>一</sub>。

釋曰。若<sub>シ</sub>人<sub>ハ</sub>已<sub>ニ</sub>於<sub>テ</sub>無色界<sub>一</sub>受<sub>ル</sub>生<sub>一</sub>、起<sub>ス</sub>出<sub>ル</sub>世<sub>ハ</sub>心<sub>一</sub>、世間心<sub>ハ</sub>必<sub>ズ</sub>滅<sub>ス</sub>盡<sub>セリ</sub>。若<sub>シ</sub>離<sub>レ</sub>本<sub>ニ</sub>識<sub>一</sub>、則<sub>チ</sub>應<sub>ニ</sub>捨<sub>ル</sub>無色界<sub>一</sub>報<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>由<sub>テ</sub>功<sub>ニ</sub>用<sub>一</sub>、即<sub>チ</sub>入<sub>ル</sub>無余涅槃<sub>一</sub>、既<sub>ニ</sub>無<sub>レ</sub>此<sub>ニ</sub>義<sub>一</sub>。故<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>揆<sub>ス</sub>無<sub>レ</sub>此<sub>ニ</sub>識<sub>一</sub>。

この箇所は真諦訳とチベット訳等他訳と一致している。

[1.39] 論曰。若<sub>シ</sub>衆生<sub>一</sub>、生<sub>テ</sub>非<sub>ニ</sub>想<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>想<sub>ニ</sub>中<sub>一</sub>、起<sub>ス</sub>不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>處<sub>一</sub>、及<sub>テ</sub>無<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>、即<sub>チ</sub>捨<sub>テ</sub>不<sub>レ</sub>處<sub>一</sub>。

釋曰。若<sub>シ</sub>聖人<sub>一</sub>、生<sub>テ</sub>非<sub>ニ</sub>想<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>想<sub>ニ</sub>處<sub>一</sub>、有<sub>ル</sub>時<sub>ハ</sub>依<sub>テ</sub>不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>處<sub>一</sub>、起<sub>ス</sub>無<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>。為<sub>シ</sub>不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>處<sub>一</sub>心<sub>ハ</sub>明<sub>ク</sub>了<sub>ル</sub>、非<sub>ニ</sub>想<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>想<sub>ニ</sub>心<sub>ハ</sub>閑<sub>ク</sub>味<sub>ク</sub>。故<sub>ニ</sub>此人<sub>ハ</sub>在<sub>テ</sub>明<sub>ク</sub>了<sub>ル</sub>地<sub>一</sub>、修<sub>ス</sub>無<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>。若<sub>シ</sub>得<sub>テ</sub>無<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>心<sub>一</sub>、即<sub>チ</sub>捨<sub>テ</sub>非<sub>ニ</sub>想<sub>ニ</sub>非<sub>ニ</sub>想<sub>ニ</sub>及<sub>テ</sub>不<sub>レ</sub>用<sub>レ</sub>處<sub>一</sub>地<sub>一</sub>。

論曰。何以故。無流心是出世心故、非想非非想道、

チベット訳

「論曰。」その処（無色界）に於いて、出世間の心が現在前した時には、それ以外の他の世間の心は滅尽することから、彼の趣を滅離することになる。

「釋曰。」「人は」その処（無色界）に於いて、出世間の心が現在前した時には、それ以外の他の世間の心は滅尽することから、他の趣を滅離することになる」とは、努力することなくして無余依涅槃を得るといふそれが断ぜられるとき、則ちアーラヤ識を離れてはどのように非ざることから滅しない。

チベット訳

「論曰。」非想非非想処に生じた人は無所有処の「心」と、出世間の心が現在前した時には、それらの二趣は滅離するであろう。その出世間の識は非想非非想処の趣を所依とするのでは無く、無所有処の趣の所依も無いものであり、涅槃の趣を所依とするのは道理に合わない。「それ故に、所依としてアーラヤ識を離れては

非<sup>ス</sup>其<sup>ノ</sup>依<sup>レ</sup>止<sup>ニ</sup>。不用處道亦非<sup>ニ</sup>依<sup>レ</sup>止<sup>ニ</sup>。

釋曰。第一第二道、是世間法故、不<sup>レ</sup>得<sup>下</sup>為<sup>ニ</sup>無流心<sup>ニ</sup>作<sup>中</sup>。依<sup>レ</sup>止<sup>上</sup>。是人於<sup>ニ</sup>余<sup>ノ</sup>地<sup>ニ</sup>生<sup>シ</sup>、別取<sup>ニ</sup>余<sup>ノ</sup>地<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>。此二道亦非<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>心<sup>ニ</sup>依<sup>レ</sup>止<sup>ニ</sup>。何以故。此心明了<sup>ナルガ</sup>故、不<sup>レ</sup>依<sup>レ</sup>止<sup>ニ</sup>第一道、已捨<sup>ニ</sup>第二道<sup>ヲ</sup>。第二道亦不<sup>レ</sup>得<sup>下</sup>為<sup>ニ</sup>此心<sup>ニ</sup>作<sup>中</sup>。依<sup>レ</sup>止<sup>上</sup>。

論曰。直趣<sup>ニ</sup>涅槃<sup>ニ</sup>、亦非<sup>ス</sup>依<sup>レ</sup>止<sup>ニ</sup>。

釋曰。由<sup>テ</sup>有<sup>ニ</sup>無流心<sup>ニ</sup>、以<sup>テ</sup>煩悩<sup>ノ</sup>有<sup>ル</sup>故<sup>ニ</sup>。此<sup>ノ</sup>三義明<sup>ニ</sup>依<sup>レ</sup>止<sup>ニ</sup>既<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>成<sup>ズ</sup>。若離<sup>ニ</sup>本識<sup>ニ</sup>、如<sup>キ</sup>此<sup>ノ</sup>無流心<sup>ニ</sup>依<sup>レ</sup>止<sup>ニ</sup>。何<sup>レ</sup>法<sup>ニ</sup>。

有りえないことになる。」

「釋曰。」「非想非非想處に生じた人は無所有處の「心と」出世間の心が現在前した時は、」それにより、その「無所有處の」心は明了に起るのに対して、非想非非想處の「心」は明了に「起ら」ないのである。それ故に、その「無所有處の」明了なる心を所依として出世間の心は現在前する、その出世間の心は同一であって、その依止の趣には二つあることは道理に合わない。

その世間は地は他に生ずる者は他の地の心が現在前する、二種の趣も所依について道理に合わないものであり、その「世間の」心は有余依涅槃の依止としても道理に合わない。その故に、その第三の趣もまた依止の自性となるのは道理に合わないから、アーラヤ識を離れては、その「出世間の」心は何「の法」を所依とするのか。「その所依とするものはないことになる。」

この箇所は真諦訳とチベット訳等他訳とはほぼ一致している。しかし、チベット訳・玄奘訳が出世間心と訳するのを、真諦訳はわざわざ無流心と訳したようで、しかもそれを出世間心とことわっている。

(A) [1.40] 論曰。復次、若人、已作<sup>ニ</sup>善業<sup>ヲ</sup>、及以<sup>テ</sup>惡業<sup>ニ</sup>、

釋曰。若人、於<sup>ニ</sup>世間<sup>中</sup>、作<sup>ス</sup>不殺生等<sup>ノ</sup>十善業<sup>ニ</sup>、決

チベット訳

「論曰。」善を造り、或は悪を造った人は臨終の時に

真諦訳「撰大乘論世親釈」における増広部分の検討(五)

真諦訳「撰大乘論世親釈」における増広部分の検討(五)

定<sup>シテ</sup>應<sup>ル</sup>得<sup>ル</sup>二<sup>ル</sup>人<sup>ノ</sup>天<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>。若<sup>シ</sup>作<sup>ル</sup>二<sup>ル</sup>殺<sup>ス</sup>生<sup>ス</sup>等<sup>ノ</sup>十<sup>ノ</sup>惡<sup>ノ</sup>業<sup>ヲ</sup>、決<sup>シテ</sup>定<sup>シテ</sup>應<sup>ル</sup>得<sup>ル</sup>二<sup>ル</sup>四<sup>ノ</sup>趣<sup>ノ</sup>生<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>。

(B) 論曰。正<sup>ニ</sup>捨<sup>テ</sup>壽<sup>ヲ</sup>命<sup>ヲ</sup>、離<sup>ル</sup>二<sup>ル</sup>阿<sup>ノ</sup>梨<sup>ノ</sup>耶<sup>ノ</sup>識<sup>ヲ</sup>、或<sup>ハ</sup>上<sup>ニ</sup>或<sup>ハ</sup>下<sup>ニ</sup>次第<sup>ニ</sup>依<sup>テ</sup>止<sup>ス</sup>冷<sup>ノ</sup>觸<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>應<sup>ル</sup>得<sup>ル</sup>レ<sup>ド</sup>成<sup>ル</sup>。

釋曰。是<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>、於<sup>テ</sup>三<sup>ノ</sup>死<sup>ノ</sup>時<sup>ノ</sup>中<sup>ニ</sup>、若<sup>シ</sup>有<sup>ル</sup>二<sup>ル</sup>善<sup>ノ</sup>業<sup>ヲ</sup>、定<sup>シテ</sup>應<sup>ル</sup>向<sup>ル</sup>レ<sup>ド</sup>上<sup>ニ</sup>、若<sup>シ</sup>有<sup>ル</sup>二<sup>ル</sup>惡<sup>ノ</sup>業<sup>ヲ</sup>、定<sup>シテ</sup>應<sup>ル</sup>向<sup>ル</sup>レ<sup>ド</sup>下<sup>ニ</sup>。若<sup>シ</sup>汝<sup>ノ</sup>、不<sup>レ</sup>信<sup>シ</sup>有<sup>ル</sup>二<sup>ル</sup>本<sup>ノ</sup>識<sup>ヲ</sup>、云<sup>フ</sup>何<sup>レ</sup>此<sup>ノ</sup>依<sup>テ</sup>止<sup>ス</sup>身<sup>ヲ</sup>、或<sup>ハ</sup>下<sup>ニ</sup>冷<sup>ノ</sup>觸<sup>ヲ</sup>、或<sup>ハ</sup>上<sup>ニ</sup>冷<sup>ノ</sup>觸<sup>ヲ</sup>、次<sup>ニ</sup>第<sup>ニ</sup>得<sup>ル</sup>成<sup>ル</sup>。若<sup>シ</sup>無<sup>ク</sup>有<sup>ル</sup>二<sup>ル</sup>本<sup>ノ</sup>識<sup>ヲ</sup>、云<sup>フ</sup>何<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>レ<sup>ド</sup>成<sup>ル</sup>三<sup>ノ</sup>本<sup>ノ</sup>識<sup>ヲ</sup>能<sup>ク</sup>執<sup>シ</sup>持<sup>ス</sup>二<sup>ル</sup>五<sup>ノ</sup>根<sup>ヲ</sup>。本<sup>ノ</sup>識<sup>ヲ</sup>若<sup>シ</sup>捨<sup>テ</sup>、依<sup>テ</sup>止<sup>ス</sup>身<sup>ヲ</sup>隨<sup>テ</sup>所<sup>ニ</sup>捨<sup>テ</sup>處<sup>ニ</sup>冷<sup>ノ</sup>觸<sup>ヲ</sup>次<sup>ニ</sup>第<sup>ニ</sup>起<sup>ス</sup>、所<sup>ニ</sup>捨<sup>テ</sup>之<sup>ノ</sup>處<sup>ニ</sup>、則<sup>チ</sup>成<sup>ル</sup>二<sup>ル</sup>死<sup>ノ</sup>身<sup>ヲ</sup>。

(C) 論曰。是<sup>レ</sup>故<sup>ニ</sup>生<sup>ス</sup>染<sup>ス</sup>汚<sup>ヲ</sup>、離<sup>ル</sup>二<sup>ル</sup>一<sup>ノ</sup>切<sup>ノ</sup>種<sup>ノ</sup>子<sup>ノ</sup>果<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>識<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>ク</sup>得<sup>ル</sup>立<sup>ス</sup>。

釋曰。生<sup>ス</sup>染<sup>ス</sup>汚<sup>ヲ</sup>、即<sup>チ</sup>是<sup>レ</sup>受<sup>レ</sup>生<sup>シ</sup>得<sup>ル</sup>レ<sup>ド</sup>生<sup>ス</sup>、依<sup>テ</sup>止<sup>ス</sup>、執<sup>シ</sup>持<sup>ス</sup>等<sup>ヲ</sup>。是<sup>レ</sup>染<sup>ス</sup>汚<sup>ヲ</sup>因<sup>ニ</sup>果<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>、通<sup>ス</sup>名<sup>ニ</sup>染<sup>ス</sup>汚<sup>ヲ</sup>。又<sup>ハ</sup>、生<sup>ス</sup>死<sup>ス</sup>對<sup>シ</sup>二<sup>ル</sup>涅<sup>ノ</sup>槃<sup>ノ</sup>故<sup>ニ</sup>、名<sup>ニ</sup>染<sup>ス</sup>汚<sup>ヲ</sup>。本<sup>ノ</sup>識<sup>ヲ</sup>是<sup>レ</sup>集<sup>ル</sup>諦<sup>ヲ</sup>、故<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>種<sup>ノ</sup>子<sup>ヲ</sup>、是<sup>レ</sup>苦<sup>ノ</sup>諦<sup>ヲ</sup>、故<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>果<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>。他<sup>ノ</sup>因<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>種<sup>ノ</sup>子<sup>ヲ</sup>、他<sup>ノ</sup>果<sup>ニ</sup>故<sup>ニ</sup>名<sup>ニ</sup>果<sup>ノ</sup>報<sup>ヲ</sup>。若<sup>シ</sup>離<sup>ル</sup>二<sup>ル</sup>此<sup>ノ</sup>識<sup>ヲ</sup>、生<sup>ス</sup>染<sup>ス</sup>汚<sup>ヲ</sup>、此<sup>ノ</sup>發<sup>ス</sup>不<sup>レ</sup>成<sup>ル</sup>。

身体は下から、或は上から順に冷えてくるであろう。しかし、若し、アーラヤ識を離れては有り得ないことである。それ故に、生の雑染も若し一切の種子である異熟識を離れては有り得ないことである。

「釋曰。」その出世間の心は善を造り、或は悪を造った人は臨終の時に身体は下から或は上から「順に」冷えてくるであろう。或は「もし、アーラヤ識を離れては」有り得ない」という中に、その善を造り、悪を造った人は身体が下から或は上から冷えてくるであろう。是の如く、善を造った人は下から「冷えて」くる。悪を造った人は上から「冷えて」くる。それ故に、若しアーラヤ識によって「身体を」執持することを認めないならばどうしてその身体が冷えてくるのか。アーラヤ識がそれ(身体)を執持するが故に、身体を捨てるとき下から或は上からの如き状態により冷えてくるのである。「そして身体を」捨てることになる。

この箇所は(A)(B)(C)に区分できる。(B)の部分が真諦訳とチベット訳等他訳と一致するところである。(A)と(B)と(C)との部分は真諦訳だけにある解釈である。

(B)の部分について見ると、善を修した人は死に際して下(足)の方からだんだんと上(頭)の向へ冷えてくるとな

し、反対に、悪を修した人は死に際して上の方からだんだんに下の向へ冷えてくると説いている。チベット訳にはこれ以上の説明はない。

この譬えは、瑜伽論、決定藏論等にあることから、インドでは古くから人の寿命の尽きる時の状態についても一般的にこのように感じられたのかも知れないとされている。<sup>10)</sup>

(B)の箇所に対する解説が(A)の部分である。それによれば、不殺生等の十善業を作した人はその功德によって人天の生報(果報)を受けることができる。これに対して、殺生等の十悪業を作した人はその報いとして四趣の生報を受けることになるかと解釈している。しかしなぜかこれは大道の中に限定されている。

(C)の部分も真諦訳にだけあるものである。そこで、生の染汚を説いて、それは依止身であり執持であると説く。次いで、本識即阿黎耶識を集諦と苦諦とによって、「本識は是れ集諦なるが故に種子と名づけ、是れ苦諦なるが故に果報(異熟)と名く。他の因なるが故に種子と名け、他の果なるが故に果報と名く。」と説いて一切種子識を集諦として、異熟(果報)識を苦諦として解釈している。

注

(1) 拙論「真諦訳諸論書における阿黎耶識説について」(三)「(国訳一切経、三藏集、第二輯、大東出版社、昭和五十年)三四二—三四三頁。

拙著「真諦の唯識説の研究」(山喜房佛書林、二〇〇四年三月)、九三—一二九頁。

字井伯寿「印度哲学研究」第六、(岩波書店、昭和四十一年)五四九—五五〇頁。

同「撰大乘論研究」(岩波書店、昭和四十一年)三一八—三一九頁。

(2) 拙論「増補改訂・初歩唯識入門—仏教における「こころ」と「からだ」」(山喜房佛書林、二〇〇五年五月)

真諦訳「撰大乘論世親釈」における増広部分の検討(五)

真諦訳『撰大乘論世親釈』における増広部分の検討（五）

〔追記〕

「真諦訳『撰大乘論世親釈』における増広部分の検討」（一）～（五）までが学位請求論文『真諦の唯識説の研究』（平成六年博士（文学）取得）に記載したものである。